ラヂオ・ドラマ選者の言葉

岸田國士

ラヂオ文学といふ新しい様式について、私は常に興味をもち、なにか原理的なものを発見しようと心掛けてゐるのだが、放送局との関係も、別にそのために特殊な便宜を与へられてゐるわけではないから、なかなか思ふやうに研究もできないでゐる。

今日まで、ラヂオ・ドラマと称せられてゐる一種の形式も、自分だけの頭では、いろいろな空想が結びついてゐるが、それを実際に試みてみる機会さへ容易に得られないのである。

私はラヂオ小説乃至ラヂオ物語といふやうなものも考へてゐる。

ラヂオ風景とは、どこから生れて来た言葉か知らぬが、要するにかういふ名称は、文学の様式的分類から云へば、甚だ根拠のないもののやうに思はれる。単に「スケッチ」風のものだとすれば、創作として別個の扱ひを受ける必要もなく、小説かドラマかの部類に組入れて差支ないやうに思ふ。小説とかドラマとかいふ概念を近代風に解釈すればそれでいいのである。現に今度の応募作品中、はつきりその特殊性を示したものは一つもない。小説でもドラマでもないといふ勝手な「制限」が、却つて、これを「芸術的」に調子の低いも

のとし、興味索然たらしめることに役立つてゐるのみである。それ故、若しこの形式を独立させるとしたら、やはり「風物詩」の抒情味を生命とするものでなくてはなるまい。

ラヂオ・ドラマの方はどうかと見ると、これも大体、この新様式に対する認識が不十分であるやうに思ふ。といふ意味は、「耳で聴く」といふ観念が先になつてゐるだけで、「耳を通して眼の仮感に愬(うった)へる」といふ最も本質的なラヂオ文学の要素を閑却してゐることである。例へば、対話による描写を主とすることは、一見

ラヂオ・ドラマの本質らしく考へられるが、しかし、その対話が、俳優の直接表情によつて生かされるやうな種類のものは、真にラヂオ的とは云へないのであつて、寧ろ対話そのものが、おのづから明確な表情を連想させ、同時に生活の雰囲気を髣髴させるやうに書かれてゐなくてはならないのである。

もう一つ大切なことは、ラヂオ文学に於ては、舞台劇や映画などと同様、「誘導的」なリズムを生命とするから、眼に見えないためにもどかしさを感じさせ、そのために、幻想を運ぶ心理的「音色」の効果を鈍らせてはならぬのである。語調語勢の波動が、緩急抑揚の

技術を滞りなく生かして行かねばならぬ。

さて、かういふラヂオ文学の特殊技巧以外に、私は、内容的な精神美と作家的な「表現力」を要求する。勿論、放送用としてある程度の普遍性は望ましく、さうかと云つて、大衆向きを標榜する卑俗な趣味は断乎として排斥するものである。

人情を取扱ふのはよろしいが、安価なセンチメンタリズムでは困るし、社会諷刺結構であるが、ヒステリツクな独りよがりは相手になれぬ。取材の時代的範囲は自由であるが、感覚と思想には何処か新鮮なところ

があつてほしい。

何れにせよ、聴取者の大部を「退屈させない」なにものかを有し、その上、彼等の（即ちわれわれの）健康な魂に呼びかける若干の文化的意義を要求したい。

私の手許に送られた作品の中で、以上の要件を悉く具備したものは、残念ながら一つもなかつたが、参考のために、私の採点標準に従つて、左に入選作品を抜き、簡単な批評を加へれば、——

爆音

思想やゝ単純なるも、浅薄ならず、素朴なる感情と

明朗なる技巧、共に愛すべく掬すべし。この一篇を得たることで、選者はやゝ満足せり。

春と夫婦

万人向きの主題、平俗なるも野卑に陥らず、描写とリズムに破綻少きを取る。

春

調子に若干の古臭さを感ずるも、形式的に一つの試みを示し、その意図を押し切りたるところ興味浅からず。

不良

相当の筆力を示し、心理劇として見るべきところあ

り。但し、ラヂオ・ドラマとしてやゝ平板の嫌ひあり。

家族会議

機智的な会話に十分才能を認め得るも、後半は著しく弛緩し、修正を加ふにあらざれば退屈至極ならん。

母に生きる

相当作家的習熟を感ぜしめる点に於て、「不良」と共に注目すべき作品なるも、対話が心理的に過ぎ、ラヂオ的イメージ稀薄なり。

みんなの青空

詩味必ずしも豊かとは云ひ難きも、屋上の風物をつなぎ合せ、都会生活の浮動的断面を見せたところ、気

の利きたる思ひつきなり。

新家庭聴診

賑やかなれど退屈な生活描写が、意味もなく断続して印象の統一を妨げ、早く云へば作品以前のノートなり。患者の耳にいきなり聴診器を差し込む手はなし。但し、ところどころ、会話そのものゝ生動、なかなかに捨て難し。（日本放送協会発行「放送」昭和十年六月）

底本：「岸田國士全集22」岩波書店
　　1990（平成2）年10月8日発行
底本の親本：「現代風俗」弘文堂書房
　　1940（昭和15）年7月25日発行
初出：「放送　第四巻第七号」
　　1934（昭和9）年4月1日発行
※初出時の題は「選者の言葉その一」。
※底本の解説によれば、作品末に記載のある「(日本放送協会発行「放送」昭和十年六月)」に、この作品は掲載されていません。初出欄の「放送　第四巻第七号」が、正しい書誌情報です。

入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００９年10月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。